

音楽

感覚的な印象を、より確かなものへ ～音楽的根拠に基づいた深い学び～

音楽の解釈や表現において、「何となく…」という感覚的で曖昧な印象に留めることなく、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、根拠に基づいて判断・評価・表現できる深い学びの姿を目指します。

感覚と根拠の往還を核とした学習課程に着目し、多様な音楽体験と対話、試行錯誤の機会を通じて、生徒が音楽を多角的に捉え、自らの解釈や表現を深めていきます。

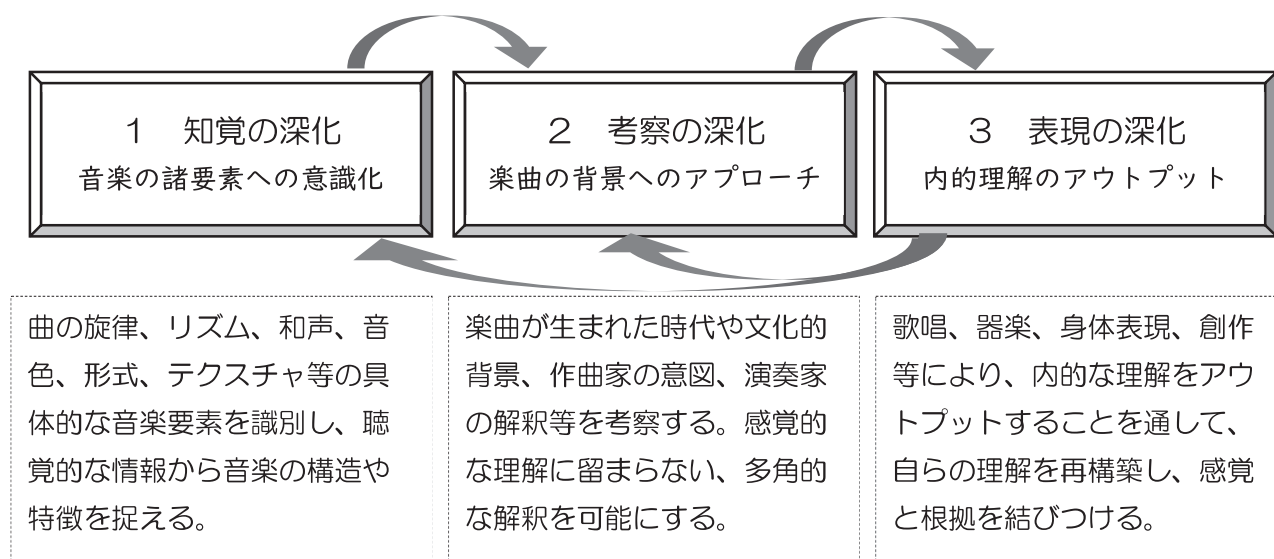


県中教研 音楽部 全県部長
新潟市立中之口中学校

校長 藤井 章

「音楽的な見方・考え方」を働かせる力を育む往還学習

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽を単なる音の羅列としてではなく、構成要素、背景、表現意図などの多様な視点から統合的に捉えて読み解き、自分の思いや、生活や社会、伝統文化等と関連付ける力と言えます。この力を育成するためには、以下の3つの視点において、幅広い領域・分野にわたって、長期的な視野での往還学習が求められます。これを、深い学びの20の技法と関連付けていくことが重要な視点です。



感覚 ⇄ 根拠、個別 ⇄ 全体、思考 ⇄ 表現【往還と価値づけ】

授業者はファシリテーターとして生徒の思考を促し、気付きや発想を価値づけ、対話を支援します。多角的な活動を展開する中で、生徒が音楽を通して論理的な思考力と豊かな感性を統合し、生涯にわたって音楽を豊かに享受し、創造・発信していくための資質・能力を育むことを目指します。

指定研究 1 年次の実践から

【上越地区：柏崎市・刈羽郡中教研】

上越地区は、柏崎市立北条中学校を会場に行いました。2年生10名という少人数ながら、生徒たちが楽譜から読み取った根拠をもとに、対話しながらよりよい歌唱表現を追求しました。

2年次では、そうした自分の思いや感じ取ったことを言語化する力をさらに高め、協働して音楽を練り上げていくとともに、音を磨く過程（発声・発音の工夫、音の処理の仕方、正確な音高・音価）にも着目させながら、「音楽的な自立」を目指して取り組む成果を発表します。



【新潟地区：新潟市中教研】

新潟地区は、指定研究1年次と2年次で会場校・授業者を変えて取り組んでおり、1年次は新潟市立鳥屋野中学校を会場に、今井優太教諭による授業を行いました。

深い学びの20の技法から、③⑤⑬を選択し、自校のCMソングを創作しました。アプリGarage Bandの活用と併せて、課題提示で導入した創作条件の提示によって、活動への意欲喚起や取り組み易さにつながる工夫・配慮がなされていたこと、グループ活動で生徒同士が様々な価値観に触れて考えを深めたり、生徒の気づきを的確に取り上げて価値づけていた授業者の姿が印象的な実践でした。



音楽 重点方針

生涯にわたって音楽に親しむ生徒を育てる。

- 音楽のよさを感じ、伝え、関わり合いながら学び、考える授業を展開する。
- 音楽を形づくっている要素を支えとして、思いや意図をもって表現する生徒を育てる。

音楽 <上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研>

11月28日(金) 研究会開催

研究主題：深い学びにいたる、豊かな音楽性を育む授業
～生徒の音楽的な自立を目指して～

題 材 名：「3年：わたしたちの表現を追求しよう」

会 場 校：柏崎市立北条中学校

公 開：1学級

授 業 者：小林 良輔

指 導 者：新潟大学名誉教授 伊野 義博 様



研究推進責任者
柏崎市立東中学校
安中 美香



教科・領域担当者
柏崎市立北条中学校
小林 良輔

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が自分のよさや、これまでに培われた音楽性を発揮し、音楽的な自立に向かうことを深い学びの姿とし、音楽的な資質の向上と生徒一人一人が輝く授業づくりの具体化を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.16） 解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

教師の視点を概念化・言語化し、学んだ知識や技能とともに活用して、自分たちの視点で歌唱表現を追求する。

生徒は、教師の視点や既習の知識・技能を手掛かりに、自分に内生した感覚や気づきが何であることを明らかにし、活用できるツールとして具体化することで、自分たちの視点で歌唱表現を追求するようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.11）

楽譜から深く読み取ったことと実際の音や音楽から感じ取ったこととを関連付けて表現する。

生徒は楽譜からの読み取りと、実際の音から感じ取ったことを関連付け、音楽的な根拠をもって表現するようになります。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げる。

生徒は、自分の意図を音にして歌ったり、身体表現を伴ったりして、交流しながら、音楽を練り上げるようになります。

単元(題材)の様子

表現の練り上げの過程において、生徒に内生した感覚や気付きが何であるのかを明らかにする手立てとして、「教師が何に注目していたのか」を概念化・言語化(意味を考える・それらを関連付ける・身体で表現する等)し活用モデルとします。生徒はこれを用いて、「自分たちは何に注目するのか」を考え、「音楽的な自立」を促します。

ポイント1



1 年次公開授業の様子

概念化・言語化された感覚や気付きと、既習曲で学んできた知識(音楽を形づくっている要素・アーティキュレーション等)やそれらを表現するための技能(発声方法・体の使い方・ソルフェージュ等)とともに活用して、歌唱表現を追求するようになります。

ポイント1



楽譜から深く読み取ったことを実際の音や音楽から感じ取ったことと関連付けて表現します。

これにより、楽譜から深く読み取ったことと、実際に歌う中で「こうしたい」の思いを関連付け、音楽的な根拠をもって表現するようになります。

ポイント2



1 年次公開授業の様子

仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げます。

これにより、自分の意図を音で表現・言語化・身体化し、仲間と試行、模倣、意図する表現をするための技能について選択、共有して、より深い音楽表現を追求するようになります。

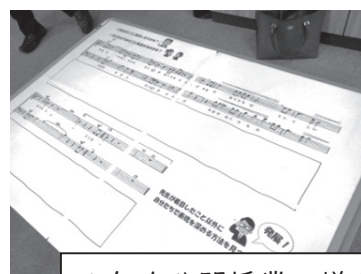
ポイント3



研究会

研究会当日は、「表現の創意工夫」として、協働して合唱曲を練り上げていく様子をご覧ください予定です。

- ①楽譜から読み取ったことや音から感じ取ったことをワークシートにまとめて、具体的な表現活動につなげます。
- ②音や身体表現を伴った交流活動を行います。
- ③「概念化(意味を考える・それらを関連付ける・身体で表現する等)した学んだ知識・技能」を用いて、試行を行います。
- ④交流と試行を繰り返しながら、合唱表現を練り上げていきます。



1 年次公開授業の様子



ポイント1・2・3

音楽 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：感性を働かせて、仲間と共に

音楽に関わり続ける生徒の育成

題 材 名：「3年：“根拠”を明らかにして鑑賞しよう」

連作交響詩「わが祖国」から

ブルタバ（モルダウ）

会 場 校：新潟市立新津第一中学校

公 開：1学級

授 業 者：和田 卓之

指 導 者：新潟青陵高等学校 副校長 高橋 恒彦 様



研究推進責任者
新潟市立木戸中学校

関 裕子



教科・領域担当者
新潟市立新津第一中学校

和田 卓之

こんな深い学びの姿を目指します

習得・活用・探求という学びの過程の中で、仲間との関わりを通して音楽表現を追求していく生徒の姿を目指します。

本研究では①「見方・考え方」を深める資料を準備・提示し、その中から生徒が選択応用しながら、自ら習得した知識を深める姿 ②音楽の構成や仕組みを音楽の背景などに関わらせて考え、自分の言葉でまとめることができる姿を目指しています。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

視点・観点・論点を具体的に設定し、自立した思考や表現につなげる。

生徒は、学びの方向性をしっかりと定めることができ、「進んで学びたい」と自立した学びへとつなげます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5）

仲間と協働し、資料やデータに基づいて考察したり、検証したりする活動を組織する。

生徒は、複数の資料やデータから必要なものを選択・応用し、自ら課題解決に近づこうとするようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

学びを表現する場面で理由や根拠を示すことを意識させることで、論理的な思考を促す。

生徒は、物事の道筋や考え方が明確になり自らの言葉で学んだことを整理し、まとめることができるようになります。

単元(題材)について

連作交響詩「わが祖国」は、6つのチェコの自然や伝説に基づく6つの交響詩で構成された作品で、「ブルタバ」(モルダウ)はこの作品の一つです。

「ブルタバ」(モルダウ)は、チェコを流れる川の源流から市内へと続く川の情景がオーケストラの豊かな響きで描写されており、聴き手の想像が広がります。その情景を音楽のどの要素から裏付けされているのかを分析しながら聴くことで、根拠をもって曲想を感じることができます。

今回は、総譜(スコア)を用いることで、その根拠の論理性を強めることを目指します。

単元(題材)の様子

ポイント1

課題設定の場面において、「何を考えればいいのか」「どのような手順で考えればいいのか」「どのような視点で考えればいいのか」を分かりやすく提示します。

学びの方向性を分かりやすく示すことで、自立した学びを促すとともに、音楽が苦手だと感じている生徒にも「進んで学びたい」という意欲をもたせます。

ポイント2

複数の資料やデータを提示し、生徒はそこから課題解決のために必要なものを自ら選択し、応用します。

生徒は様々な資料やデータに基づいた考察や検証をすることで「見方・考え方」を働かせ、課題解決に近づくことができます。

また、仲間と協働して行うことで、様々な価値観にふれることができ、さらに深い学びにつながります。

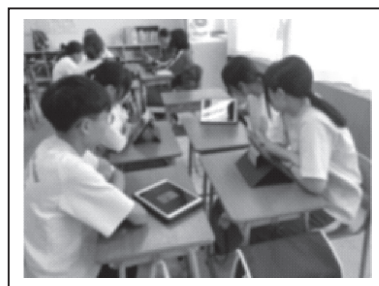


ポイント3

学んだことを整理し、まとめる場面を設けます。その際、理由や根拠を示すことを意識させ、物事の道筋や考え方をはっきりさせる論理的な思考を促します。

物事の道筋や考え方が明確になることで、生徒は自らの言葉で学んだことを整理し、まとめることができますようになります。

また、仲間との音楽活動を通して様々な意見や感想、評価を得ることで自らの思いや意図を論理的に表現する力を伸ばし、聴き手に伝わる表現力が向上します。



研究会

当日は現地参観とzoomをつないで授業を公開します。授業実践を共有できるように事前に指導案・ワークシートを送ります。可能であれば事前に授業で実践してみてください。

「ブルタバ」の聴き取りを深める手立てとして、「オーケストラスコアの活用」「仲間との音楽活動の関わり」が有効だったかを参観のポイントとして授業を見ていただき、その後の協議会で意見交換します。